

「 災害の記憶話と記録ひにふれて 」

高知県 学校法人高知学園高知小学校 3年 <sup>なかやま</sup>中山 <sup>きいちろう</sup>暉一朗

昨年の夏、家族旅行の前に発令された南海トラフ地震臨時情報をきっかけに、ぼくの家族は災害のことを積極的に知ろうという雰囲気になりました。

まず、高知県土木部防災砂防課のホームページにある「みんなで学ぼう。なぜ？なに？土砂災害（こども Ver）」を読むことから始めました。この冊子はカラー刷りで、読んでみたい、見てみたいと思える作りになっていて、しかも、イラストが文字の多さを和らげてくれて、2年生だったぼくでも読み進められました。特に、「避難のタイミングととるべき避難行動」のおかげで、ニュースでよく耳にする言葉の意味を「なんとなく」から「しっかり」と理解できるようになりました。さて、3年生の夏休みをむかえました。

今年も昨年と同様に、災害について考えることにし、家族で話し合いました。

その中で、お父さんが経験した1998年8月の「高知豪雨」が話題になりました。

この出来事は、今から27年前のことで、先ほど紹介した子供向けの冊子にはのっていませんでしたが、大人向けの冊子「知っちゅう！備えちゅう！高知の土砂災害（大人 Ver）」に記事があり、人的被害8名、家屋被害141棟とあります。人的被害の数字8はしげとう災害、昭和50・51年連年災害と比べると少ないですが、このことをもって災害への備えが十分に行き届いていると甘く見てはいけませんし、人の命は絶対に守らなければいけません。

また、驚いたことに、お父さんがこの豪雨の経験者でした。その記憶話で、特に、「夜の塾帰り、車に水があたって、ごぼごぼ！ごぼっ！と不気味な音がしてこわかった」「今思えば、いつもと違う雨降りです道路事情も変だった」「異変は、翌朝、茶色の湖と化した大津地区を見て確信した」などと聞き、冊子の人的被害や家屋被害の数が一層重たく感じました。さらに、「いつもと違う」雨降りといった点は、教訓の「深夜の猛烈な雨で大きな被害に。気象情報は随時確認をするのじゃ！」とあるとおり気象情報の適切な理解も大切だと改めて感じました。

そして、今、ぼくは、その豪雨の記録ひとなる「大津地区水害記録ひ」の前に立っています。記録ひを見上げると、赤色の矢印が上面の一边を指し、その矢印の下に、「1998年9月25日、集中豪雨最高水位」と文字があります。記憶話とあわせて見ると、本当にこんなところまで水がきていたんだ！信号機も見えなくなるくらいだ！と知りました。記録ひは、ぼくに災害の大きさを実感させてくれたばかりでなく、「日頃から災害に備えて命を守ろう」とうったえかけてくるようでした。

今後も災害への備えをしっかりやっていこうと思います。